

信念の結実

鈴木 竹志

仙台在住の佐藤通雅が長年刊行してきた個人誌「路上」が、先月出された百五十号をもって終刊となった。第一号が出されたのが、一九六六年一月だから、五十五年にも及ぶ年月をこの雑誌は刊行され続けてきたのである。半世紀以上もたった一人で雑誌を刊行し続けることが、どれほどの労力を要するものか想像すらかない。時間と資金に限っても、厩大なものであることは間違いないだろう。

自分が書きたい原稿、自分が載せたい原稿が掲載される雑誌を出し続けたいという熱き思いを全くぶれることなく佐藤は貫き通して、百五十号まで出し続けたのである。表現の自由という概念はあるが、個人雑誌によってこそ表現の自由を実現できるという強い信念に基づくものなのである。

百五十号には、全目次と執筆者名簿が掲載されている。執筆者名簿を見ると、「路上」という雑誌がいかに先鋭的な雑誌であるかが如実に分かる。個人雑誌ではあるが、ほとんどの号に寄稿者の原稿が掲載されている。もちろん寄稿者の多くは歌人であるが、短歌以

外のジャンルに属する作家や評論家も寄稿している。佐藤自身、短歌作品だけではなく、短歌評論、児童文学評論、教育評論の分野においても著作があるので、当然これらの分野において優れた著作をもつ評論家たちも寄稿している。それ以外にも、詩人、俳人、童話作家、歴史学者、哲学者、写真家などの作品が寄稿されている。執筆者名簿に掲載された人数を試しに数えたところ、何と五百二十九名だった。これだけの作家や評論家たちの作品や文章が「路上」に掲載されてきたのである。そして、それらの寄稿者が「路上」に掲載した作品や評論が一冊の本にまとめられて数多くの著作が刊行されてきたのである。もちろん佐藤自身も歌集はもちろんのこと、連載してきた評論をまとめては刊行していて、その冊数は二十冊近くになる。近年では宮柧二の初期作品と『群鶏』について論じた評論集『宮柧二 柧二初期及び『群鶏』論』、同じく『山西省』について論じた『山西省』論』は、宮柧二研究には欠かせない貴重な労作である。コスモスの仲間にはぜ

ひ読んでもらいたい著作である。

私個人に限って言えば、四十回以上も短歌評論等を掲載させていただき、その原稿をもとに二冊の評論集を刊行することができた。

特に歌壇デビュー作とも言える『同時代歌人論』（ながらみ書房）は、佐藤との出会いがなければ決して生まれることのなかった著作である。終刊号に掲載されている目次を辿りつつ、「路上」に載せていただけたというこゝだけを励みにして、家族が寝静まった深夜ひたすら原稿を書き続けていた日々を今この稿を書きつつ懐かしく思い出す。私のような書き手が何人もいて、皆佐藤に「路上」に執筆してみないかと声をかけられ、そして、叱咤激励を受けつつ書き続けたのである。現代短歌に足跡を残す多くの作品や評論が、この「路上」から生まれたのである。

編集後記に相当する、最終頁の「ゆきしろ庵雑報」から少し引用する。

◇55年間に終止符を打つからといって、特段のことをするわけではありません。創刊号をひっそりと出したように、ひっそりと幕を閉じます。それが「路上」には最もふさわしい。

いかにも佐藤らしい言葉である。もちろん佐藤の表現活動は今後も続く。